

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 24 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26503009

研究課題名(和文)「教養」は消滅したのか - ドイツ的教養と現在の「教養」のマッピング

研究課題名(英文) Has "Bildung" Disappeared? German "Bildung" and Mapping of Cultural Knowledge in the present day

研究代表者

杉山 雅夫 (Sugiyama, Masao)

大阪府立大学・高等教育推進機構・教授

研究者番号：00196776

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：今日、我々の関心は、過去の文化的歴史的な知識から、情報技術に基づく新たな未来社会へとシフトしている。我々の社会はこの新たな技術に、あらゆるレベルにおいて依存するようになった。そしてこれまで共通の知識、いわゆる「教養」、としての役割を果たしてきた過去の文化に基づき連綿と受け継がれてきた体系的な知識は、常時検索可能で、断片的な情報に取って代わられつつある。

こうした状況の中で、我々はどのように共通「知」を見だし、自己のアイデンティティを確立保持しうるのか、を考察するために、明治、大正、昭和期の知のパラダイムの転換期における具体的な例を検討しつつ、デジタル社会の知のあり方を検討した。

研究成果の概要(英文)：Modern industrialized society depends on computer technology at all levels from the daily communication of individuals to the multi-billion dollar transactions of multinational businesses. This common knowledge, which used to be rooted in a historical and cultural heritage, is being replaced by snippets of digital information, which are readily retrieved at any time. As a result, the meaning of knowledge itself is being dramatically transformed in the new "digital society".

My concern in this study is to find out how we can create a new kind of global common intellectual foundation that can help us understand each other and also aid in identity formation or what in German is called "Bildung" in a time of a paradigm change. To make these issues clear I discuss first paradigm change from Confucianism to Western philosophy during the Meiji-period, how this relates to the transformation of common knowledge in our digital society.

研究分野：文化研究

キーワード：教養 日本思想 ドイツ哲学 デジタル社会 アイデンティティ形成 明治哲学 儒教

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 柄谷行人によれば、80年代以降、文学、すなわち広い意味での文化的、思想的な影響力は、それまでの社会を変革しようとする政治的・社会的な役目を終え、単なる娯楽と見なされるようになった。そして文学・文化的思考の代わりに金融・経済やコンピューター技術が人々の将来的な指針となっている。当然のこととして、現在人々の文化的・歴史的な関心は相対的に希薄化しつつある。人間の長い歴史の中で知的関心の中心であった文化的歴史的遺産は、もはや将来を考察するための洞察を我々に与えてくれることができなくなり、その代わりに我々の未来の指針は、情報工学や科学技術の無限の発達を前提とする「未来」自身となった。確かに文学や歴史への関心は存在するものの、それは生活の指針を得るためというよりは、現実からの逃避的なものとなりつつある。一方で我々の社会は、人々が以前期待していたような平和で、豊かな社会になる代わりに、テロや紛争が多発し、貧富の差によって社会の分断、亀裂がより深まりつつあるように見える。そこではコミュニケーションが困難になりつつある。

(2) こうした状況の中で、問題となるのは、何が現代における我々の共通理解の知的基盤になり得るのかという問題である。「教養」は時代時代の人々の政治的、思想的な価値観そして行動基準の一つとして、人間形成に重要な役割を果たしてきた。しかし経済やテクノロジーが支配的になった現代の社会においては、「教養」の機能や意味が急速に変化している。伝統的な慣習や思考が次第にその機能を失うようになる一方で、科学技術の発展に伴う効率化、さらに政治的には新自由主義的な傾向が加速し、我々は自己責任を課され、孤立化しつつある。我々には共通の知というものがますます見えにくくなっている。こうした中で、ここ十年あまりの間に急速に確立したネットからの様々な情報は、我々の生活を容易にし、新しい結びつきも可能にしたと同時に、様々なグループにそれぞれのよりどころとなる根拠を提供するようになった。同時に、我々の知は、身近の可視的な世界から乖離し、スクリーンを経て、場所を特定し得ない、往々にして匿名の情報源の情報を見聞きすることの一般化によってバーチャル化しつつある。こうした情報収集のあり方の変化は、書物や人を介してきた、我々の従来の共通の形成のプロセスとは大きく異なっている。この変化は、テレビやラジオといった情報伝達のもたらした変化とも異なる、前代未聞の大きな変化である。そのため、我々に将来的で価値的な指針を提供してくれる共通の知の役割や質、そのあり方を現在において多面的に検証しておく必要があると考えた。

## 2. 研究の目的

1) この研究の第一の目的は、上で述べたような、共通の知的な基盤としての「教養」知、の変化を明確にするために、まず歴史的な知の転換のパラダイムの例を取り上げ考察し、現在及び将来における社会的知の共有がどのように可能なのか、そしてどのような形で我々は将来よりよい相互理解の基盤を作り上げながら、文化間の対立や紛争を避けうるのかということ考察することである。というのも、上に述べたように、共通の知が細分化され、その共通性が見えなくなることによって、共通の対話的基盤を見いだすことが困難になり、他者に対する不信感が高まること懸念されるからである。

その最初の段階として、明治期、大正、昭和、戦後などの時代の大きな転換期に、どのように教養のパラダイムの変化が生じ、内容的にいかに変化していったのかを考察した。とりわけ明治の初期に儒教的な知の体系が次第に西洋的な知に取って代わられる過程は、知のパラダイムを考えるにあたって我々の現在及び将来の知のあり方の考察に極めて大きな示唆を与えてくれると考えられるからである。

(2) 第二に、この「教養」というものが、古典的なあり方から、現在においてどのように変容し、どこにどのように存在しながら、我々に価値観を提供し、我々の自己を形成しているのかを、様々な社会的な次元において考察することであった。とりわけここ数十年における社会のデジタル化の中で、我々の知へのアクセスのあり方は大きく変化した。ネット上の知は量的に増大し、多様になった一方で、体系性を失い、寸断され、質的な補償を失い、コピーされ、ランダムに拡散されるようになった。こうした知の質的量的変化の中で、我々がどのように知を取り入れ、共通な知的基盤を形成しようのかだけでなく、それが我々の人間観やコミュニケーション方法にどのような変化を与え、我々の社会観をどのように変えているのかを考察することがこの研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

(1) 基本的な研究方法は、関連する文献データを収集・調査するとともに、海外における様々な学会等への参加を通して、知がどのように変容しているのかを多様な視点から考察することであった。「教養」という視点から、歴史的にそのあり方を辿りながら、また同時に現在における知の拡散のあり方を考察し、現在の知の新しいあり方をマッピングするという包括的な研究は、ほとんど存在せず、極めて時間のかかる、また他領域にまたがるものである。関係する学会も、様々な領域にまたがるため、現在所属する学会組織を超えて、様々な新規の学会に関わるようになった。このため学会発表などは様々な制約のため行われなかったものの、様々な専門家

からの意見や視点を学ぶことができた。

(2) IEEE 開催のダブリンにおける学会において、ヨーロッパやアフリカ諸国で、情報テクノロジーを用いた、様々な試みが報告されたが、国や地域の様々な状況において、達成度は極めて多様であり、いわゆる先進工業国を前提にした近代的な情報網や効率的な情報伝達は世界的な基準になりえないということ認識した。又こうした情報の不均等な共有に関しては、一国の国内においても当てはまる。世代の違いによる時代的価値観の格差、教育の程度の格差、階級の違いによる経済的格差などにより、我々の所有する知は大きく異なる。インターネットは、グローバルにネットワーク化されているが、だからと言って、アクセスする我々がグローバルな知識を所有するわけでは必ずしもない。我々はむしろかえって特定な情報源にのみアクセスする傾向もあり、包括的な状況から孤立化する危険性もある。こうした意味で、様々な階層やグループ毎に、その集団にとって生の指針となる価値観や世界観を提供してくれる知の基準である「教養」を考察することが必要である。しかしこれは領域が広すぎるので、基本的に過去においては、知的支配のエリート層の知の象徴であるような学問的な思想体系、江戸においては儒教、明治以降については主にドイツ哲学を扱った。また、現在においては、そうした中心的な思想は、とりわけ東西の壁の崩壊以後、政治的なイデオロギーの弱まりと共に消滅し、大衆文化へと細分化しながら崩壊したように見える。そのため、現在の教養を考えるにあたっては、主にコンピューターを利用するサラリーマン層を主にイメージし、主に文献に基づいて調査をした。

#### 4. 研究成果

1) 江戸時代までの伝統的な思想の流れの中に、明治以降「西洋哲学」が新たに導入され、それ以降第二次世界大戦敗戦に至るまで日本の知識人層は、欧米、とりわけドイツ哲学・文学を核とする教養理念を積極的に受容した。中でも、厳格で先験的な道徳律を前提とするカント哲学は、日本の思想界に大きな影響を与えた。しかしながら、それまで歴史的には関連をほとんど持たない異質な西洋思想が日本においてなぜ短期間にかつ広汎に理解され、またこれほどの影響力を持ち得たのか。このことを考察するために、江戸期と明治期の狭間に活躍した横井小楠と西洋的な学問の最初の本格的な紹介者である西周の著作を基に、当時の西洋思想と儒教思想との関連性を検討した。

儒教的な立場に立つ開国賛成論者であった小楠は、あくまで「堯舜孔子の道」に基づき、この儒教的な倫理的普遍原理を、西洋を含む全世界に適用しようと考えた。そして西洋諸国と交渉するにあたっては、この道理を一貫させることが最も重要なことであり、そ

のためには万が一の際には戦いも厭わずべしとすら考えたのである。他方で西周は、西洋学問を単なる物理的な世界についての知識としてではなく、倫理を含む総合的な知の体系として考え、儒教的倫理的な世界観と対峙させて考察した。当時日本の知識人の間では、西洋的な知見は「西人未曾知理」といわれたように倫理的な基盤を欠いている一方で、技術面だけは優れていると見なされていたが、西は西洋の「理」には人間理性と自然法則という二つの異なった原理があり、西洋的な「理」概念が儒教的な理の概念よりさらに包括的であることを見いだした。しかし西は「教門論」に見られるように儒教的な天や理一分殊という考えを放棄したわけではなく、むしろこうした概念を中心にしてとりわけ西洋の思想的、社会科学的な議論を理解した。日本の思想的な文脈における西洋化のプロセスはこうして、重層的に相互作用の中で開始されることとなった。しかしこのような儒教と西洋哲学の生産的な関係が十分に反省されぬまま、これ以降、「西洋化」という一方的なスローガンの中で西洋「哲学」と日本「思想」は、親和することなしに相関性と異質性の関係を曖昧なまま引き摺ることとなった。

(2) (1) の考察を元に、江戸期から明治、大正、昭和にかけて江戸期までにおける儒教を中心とする哲学的議論が、西洋思想、とりわけ、ドイツ観念論によってどのように影響を受けたかをより長いスパンで思想史的に考察した。とりわけカント的な思考体系は、儒教の思考システムによって理解されたが、同時にこれとともに日本における伝統的な儒教的な議論が寸断され、架空の西洋的な伝統へと結合されていった。この過程を伊藤仁斎、荻生徂徠、貝原益軒、福沢諭吉、西田幾多郎などを論じながら示した。とりわけ、この論では武士階級の規範的な教養知であり、哲学的な議論である儒教が、明治大正を経て西洋哲学にシフトしていく中、教養知自身が知的エリートの高踏的な議論になり、現実への適応力を失った過程を、儒教の重要な概念である、「日用」という概念の喪失という点から論じた。この考察では、特に第二次大戦敗戦後の日本において、明治以前を封建的という枠で括り、就中江戸以前の思想的な意義を「日本思想」という一領域に閉じ込め、「哲学」というより普遍的な領域と断絶させることによって、日本における「哲学」が逆に、自己アイデンティティを喪失してきたことも批判的に考察した。今後特に、江戸期における様々な儒教的議論と、それについてのこれまでのいわゆる「日本思想」研究を脱「日本化」し、より普遍的な議論にして行くことが必要となるのではあるまいか。この論文は、筆者の関連の深いドイツ語圏の読者を想定して、ドイツ語で執筆された。

(3) 情報通信の発達により、知のあり方は大きく変化しているが、デジタル社会における知の拡散・変容の問題、例えば、学校現場での知の新たな相互共有のありかた、とりわけオンライン学習等を考察するために、ドイツ、アイルランドで開催された、コンピューターを使った教育に関するシンポジウム(GMW, ISTAS)に参加した。しかし、ドイツにおいてはなおもMOOCsは大方、大学個別の短期的プロジェクトで実施されている状況で、行き先の見えない状況であった。一方アイルランドの報告では、農業から、スマート・シティ、健康、家電、セキュリティー、学習など様々な分野におけるコンピューター技術の応用が報告された。こうしたことからヒントを得て、テーマを特定の領域に限定せず、まずデジタル社会における知の変容を一般的に考える必要があると考えた。そして今までのような伝統的な知の遺産との関わりのある変化について、現代におけるデジタル社会に関する議論を参照しながら、現在の社会に対する楽観論と従来の文化的遺産の喪失を懸念する相対する考え方を元に教養知の質的变化について考察した。インターネットを通しての情報通信の機器的、ソフト的な進歩は、生産過程や市場のあり方、コミュニケーションのあり方を大きく変え、情報の伝達はグローバル化、高速化している。しかし大資本によるメディアの独占化、検索サービスや個人レベルの情報、あるいは無料のニュース配信の一般化により、これまでの多様な、出所の確実なニュース配信事業者が極端に減少し、コピーや匿名のニュース情報が溢れるようになった。その結果、情報に真実性や客観性が極めて曖昧になった。更にコンピューター・テクノロジーは、金融や情報産業と一体化することで、そうしたグローバルな多国籍企業や金融機関への富の集中を加速し、その結果として極端な貧富の差を生み出すようになった。ヘッジファンドの活動などからコンピュータ画面の広告に至るまで、情報テクノロジーの知識は社会、経済生活の中で不可欠のものになり、そうした人材はより多くの社会的な上昇の可能性を持つと考えられる。こうして技術知と富の創造は一体化することとなった。またこの過程で、デジタル社会は、コンピュータによる生産の合理化を最大化し、伝統的な生産手段や仕事の質や形態を大きく変化させた。このように情報通信技術の浸透は、我々の社会を、単なる情報の拡大や再生産という問題をを超えて、社会の構造や、人間の考え方までも変えてきた。こうした知の変容の中で、伝統的、文化的な知は、技術生産や金融と結びついた情報技術の知の圧倒的な力の前に、存在意義を失ってしまうのではないかと主張する人々の意見も正当性を持つように見える。そして伝統的な知の体系は、日本において江戸の文学や儒教、漢文的な教養が、明治以降西洋の知に取って代われ、ほとんど消滅していったように、

こうした知の総体は、一度失われると復活は難しくなる。そしてまた、大きな知のパラダイムの変換をもたらしている技術的な知も、いずれ別の新たな知に取って代わられるかもしれない。われわれはむしろ、可能な限り多元的な知の体系が共存できるように考えるべきである。

(4) 最終年度である28年度においては、ハイカルチャーと呼ばれた従来の伝統的な教養システムに代わり、急速に広まったネット上に存在するビデオや画像を含むコンテンツなどを主にした新たな「サブカルチャー」が、人々の様々な生の価値観を方向付ける重要な指標として確立しつつあることを、アンソニー・ギデンスなどの論を参照しながら、アメリカドラマ、韓国ドラマなどの視聴者研究を元に考察した。というのも、もはや伝統的な文学や芸術、いわゆるハイカルチャーというのは、国家の文化政策によって辛うじて生き延びている状況であり、多くの人の関心は、日常的なネットの情報であることが一般的になっているからである。ネットによる情報の一般化は、情報の変質という問題だけにとどまらず、我々の現実体験をも変えている。我々の体験するものの多くがスクリーンを通じたバーチャルなものとなり、多くが由来の不明瞭な間接体験である。しかし、我々にはそうした体験が日常化し、違和感は希薄になっている。一方で、現実の体験は、相手と面と向かいながらも携帯を眺めることができるように、相対的に陳腐化しつつある。こうした現象は、コミュニティにも当てはまる。我々は現実の近隣のコミュニティと関係を持つ代わりに、ネット上のコミュニティのメンバーとして、意見を共有し合う。しかし、そのうちの多くの人々が、顔も居場所も知らないが、ネット上では親しい、いわゆるインティメート・ストレンジャー(富田秀典)である。こうした傾向の中で、バーチャルなものが現実となり、現実がバーチャル化しているのである。そしてこうした、生活環境の変化は、我々のアイデンティティ形成にも影響を与える。なぜなら我々は、現実を通して自己を見、それによって自己を作り上げているからである。極めて多くの人々が日常的にネットを通じて様々な情報を享受しているが、現在においてこうした情報は、柄谷行人がいったように娯楽となりつつある一方で、また別の機能を持つようになった。つまり、伝統的な社会においては、我々は一元的な規範に基づいて、自己と世界との関係を構成していけばよかったが、そうした規範的な基準が崩壊した現在において、我々は様々で雑多な情報の中から情報を選び出し、自己破綻を回避するために、「再帰的」に自己を管理していかなければならない(ギデンス)状況にある。この絶え間ない現実へのレフェレンスの中で、人々が最も接することの多い娯楽的な情報は極めて我々にとって重要なものとなっている

と考えられる。そこで、サブカルチャーの問題を取り上げ、サブカルチャーが実は多くの視聴者にとって、単なる一過性の娯楽というよりは、人生の指針を与えてくれるような役割を果たしうるということを、アメリカや韓国のドラマ視聴研究を通して示した。

研究者番号：

(4)研究協力者  
該当なし( )

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

①杉山雅夫、教養としてのサブカルチャー - デジタル時代におけるアイデンティティ形成、大阪府立大学紀要(人文・社会科学)65巻、査読無 2017、39 - 56。  
(<http://hdl.handle.net/10466/15322>)

②杉山雅夫、Der Impuls der Bildungsidee und die Entfremdung von eigener Denktradition - Ein Rueckblick auf eine verlorene philosophische Kontinuitaet in Japan,大阪府立大学 人文学論集 35 巻、査読有、2017、1-17。( <http://hdl.handle.net/10466/15304> )

③杉山雅夫、教養知は消滅してしまったのか - 文化的思考とデジタル社会、大阪府立大学紀要(人文・社会科学)64巻、査読無、2016、77-92。  
( <http://hdl.handle.net/10466/14868> )

④杉山雅夫、知の限界と普遍性 - 明治期における西洋知の受容と伝統知、大阪府立大学紀要(人文・社会科学)63巻、査読無、2015、47-63。( <http://hdl.handle.net/10466/14406> )

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

杉山 雅夫 (SUGIYAMA, Masao)  
大阪府立大学・高等教育推進機構・教授  
研究者番号：00196776

(2)研究分担者

該当なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者

該当なし( )